

三井本『孔子廟堂碑』の真相への試論

遠 藤 昌 弘*

A Study of Rubbing of “Stele Inscription for Kong Zi (Confucius) Mausoleum Hall by Yu Shinan, Mitsui Memorial Museum Collection”

Masahiro ENDO*

(要約)

現在の切り貼りされてアルバムに仕立てられた三井本『孔子廟堂碑』拓本を石碑の状態に復元することで、本来の『孔子廟堂碑』のうちの何が残され、何が失われ、また何が加筆修正されたものかを明確にする。この作業によって三井本『孔子廟堂碑』拓本の文字の内容を明らかにし、その重要性を再認識する。

(Summary)

By rearranging characters in Rubbing of “Stele inscription for Kong Zi Mausoleum hall, Mitsui collection”, which has been cut and pasted into some parts in recent album style, and restoring to the original stone monument style, it is able to clarify the parts of reserve, lost, and correction in the recent style. By this operation, it is attempted to comprehend the content of this epitaph and have a new understandings of its importance.

* 駒沢女子大学 非常勤講師

目次

0、前言

1、虞世南『孔子廟堂碑』について

2、虞世南の人物像

3、『孔子廟堂碑』拓本と翁方綱

4、三井本『孔子廟堂碑』の真相

5、結語

0、前言

三井本『孔子廟堂碑』(図1)は、その名の通りわが国の有力財閥のひとつである三井家の所有となり、現在、三井記念美術館(東京・日本橋)に秘蔵される天下無二の独孤本である。『孔子廟堂碑』は原石が失われていることから、現在の中国において見ることでできる拓本は復刻された石碑からのものである。『孔子廟堂碑』原石からの最古の拓本は、数ある拓本の中でも最も尊重される拓本である。『孔子廟堂碑』における最古拓は三井本『孔子廟堂碑』の一本しか伝わらず、これが天下無二の独孤本といわれる理由である。

三井家の所有となる経緯は、西島慎一氏「趙之謙と日本」(注0・1)に詳しい。これによれば『孔子廟堂碑』拓本を入手したのは、新町三井家の第九代当主の三井源右衛門高堅(ふつう三井高堅とよばれる1867―1945)で、三井財閥の要職を歴任した一方で、古拓名帖の大蒐集家としても高名であった。三井高堅の自邸を聴氷閣(ていひょうかく)と称したことから、そのコレクション五百三十余点は聴氷閣本として一括

され、その威容を讃えられている。三井高堅が『孔子廟堂碑』拓本を入手した時期は明確ではないが、明治三十四年(1901)から昭和二年(1927)のあいだで、おそらく明治末頃から大正年間にあたりと考えられる。その頃の中国は宣統三年(1911)に二百五十年にも及んだ清朝が終焉をとり、翌年には中華民国が成立するという未曾有の混乱期の前後十年間にあたる。この間は、とくに中国の知識人のわが国を含めて国外への亡命や、国宝級を含む文物の換金目的による国外流出などをはじめ、その状況の顛末を個々に述べるには枚挙に暇の無いほどのおおきな時代の転換点であった。こうした時代状況が、三井高堅の古拓名帖の蒐集の情熱と一致したことは、まさに人物・品物・時機・財力の宜しきを得ての奇縁であった。

筆者は、過去に羅振玉(らしんぎょく)(1866―1940)審定による宋拓『孔子廟堂碑』(注0・2)の解説を執筆したが、これも羅振玉が京都で亡命生活を送っていた時期に、中国より持ち込まれたものである。それが所蔵者の秘匿をへて、平成十七年に再び世上に現れ現在の所蔵者の意向により公刊の運びとなった。羅振玉審定本は、三井本が独孤本であることから同等を求めることは出来ないが、一等をゆずるとしてもその貴重性は何ら評価を貶めるものでないことは自明である。この解説執筆のための研究を更に発展させるべく、三井本についてその真相を確かめるようと企図したのが本稿である。

従前の研究書が、翁方綱(おうほうこう)をはじめとする過去の研究を点検するのとどまり、また字形の様式美を分析することで書法解明にとどまるものが多く、いささか停滞の感をぬぐえないものがあつた。本稿では、

とくに従来指摘される翁方綱の研究を点検して、現在の剪装本（切り貼りされてアルバムに仕立てられた拓本）となっている三井本『孔子廟堂碑』拓本を石碑の原姿へ復元を試みる。このことで『孔子廟堂碑』原石の何が残され、何が失われ、また何が補筆・補字されたものかを明確にする。この作業によって三井本『孔子廟堂碑』拓本の文字の内容を明らかにし、その重要性を再認識することを意図したものである。本稿の初出は、筆者が書道研究玄筆会『玄筆』誌に連載した「書美探訪」第二十一回から第二十四回までの「虞世南 孔子廟堂碑」と題して執筆した小論である。これに加筆・修正を加えて、新たに書き起こしたものである（注0・3）。

注0・1、大東文化大学書道研究所『大東書道研究』第十五号（2007）

所収。

注0・2、羅振玉審定・至精宋拓『孔子廟堂碑』養心書道会（2005）

注0・3、書道研究玄筆会（埼玉県川越市新宿町六―十一―二十四）、『書美

探訪』二十一（『玄筆』二〇〇六年十二月 第二十九号所載）・同二十二（『玄

筆』二〇〇七年一月 第一三〇号所載）・同二十三（『玄筆』二〇〇七年

二月 第一三二号所載）・同二十四（『玄筆』二〇〇七年三月 第一三二

号所載）。

1、虞世南『孔子廟堂碑』について

―楷書の古典、虞世南『孔子廟堂碑』― 虞世南（558―638 図2）によって揮毫者された『孔子廟堂碑』（中国では『夫子廟堂碑』という）は、とくに中国書法において楷書の古典としてかならず挙げられる名品の一つである。虞世南に、欧陽詢（557―641）・褚遂良（596―658）をあわせて初唐の三大家と称され、また顔真卿（709―785）をくわえて唐の四大家と称されて書の名人に挙げられた。

『孔子廟堂碑』は、唐太宗の勅命による孔子廟堂修築（貞観二年628）にともなうて建立された。建碑後すぐの貞観年間に罹災し、則天武后のときに重刻されたが、これも失われた。こののち宋になつて覆刻された陝西本（陝本・西廟堂碑ともいう いま西安碑林にある図2）と、城武本（東廟堂碑ともいう）がある。現在、出版されて紹介される多くは、いま我が国の三井記念美術館所蔵本のもので、清朝の碩学である翁方綱が貞観の原石拓本と審定したものである。

『孔子廟堂碑』における書美は、円満で平穩な美である。『孔子廟堂碑』と、よく比較対照されるものに欧陽詢『九成宮醴泉銘』がある。欧陽詢の書法は、謹厳で莊重な美である。一見すると虞世南の書は女性的で、欧陽詢の書は男性的ともいわれるが、この短句では両者の内在する美の深層を到底言いあてるものではない。筆者は過去に『臨書探訪』（注1・1）と題して日中の百人の能書家による古典臨書について執筆したが、ついに『孔子廟堂碑』の臨書に巡り逢うことはなかった。こ

れに比べて、『九成宮醴泉銘』など欧陽詢の手になる碑の臨書は二例があった。この理由を思量すると、『孔子廟堂碑』は『九成宮醴泉銘』に比べて特徴が捕らえにくいことが考えられる。それだけ『孔子廟堂碑』は美の要素が複雑であり、難解なものともいえる。

―『孔子廟堂碑』への評語― 『孔子廟堂碑』の揮毫年は書かれな
いものの、碑にある虞世南の官職（太子中舍人・著作郎）から、また
碑文中にある「武徳九年十二月二十九日。有詔。」から、貞観元年
（627）以後の虞世南七十歳から七十三歳のころと推定されている
（注1・2）。碑に対する評語は、唐の張懷瓘によつて言及（『書断』中、
虞世南の条。注1・3）され、「虞は即ち内に剛柔を含み、欧は即ち外
外に筋骨を露はす。君子は器を蔵す。虞を以つて優となす。」……虞
世南の書は見えないところに剛と柔を秘めている。欧陽詢の書は見え
るところに筆力と構造がある。人のあるべき姿は、その能力にうねほ
れないところである。この点によつて虞書を上等とする。……と述べ
られている。

張懷瓘は生卒不詳の人物であるが、その官歴によつて玄宗から代宗
のころ（712―779）に活躍したと考えられている。張懷瓘が『書
断』を著したのは開元十五年（727）のことであるので、虞世南が
『孔子廟堂碑』を書丹（碑文を書くこと）してから百年ほどの後の評
語である。『書断』の内容は、書体論・能書家の品第（序列をつけるこ
と）、そして人物紹介である。品第の内容は、神品（二十五人）・妙品

（九十八人）・能品（二百七人）に区分し、神品が最高の評価である。

書体ごとに人名を挙げているため重複があり、人物だけで見ると
一百七十四人になる。虞世南の書は、妙品の楷書（注1・4）と草書
に挙げられている。虞世南とほぼ同時期の欧陽詢は妙品の楷書・行書・
草書、くわえて能品の大家に挙げられている。張懷瓘が活躍した当時
の評価であることから、いまでは欧陽詢の大家などはないものであ
るが、欧陽詢が諸体をよくしたのに比べて虞世南の得意の書体は限ら
れていることがわかる。ちなみに楷書の神品に挙げられたのは鍾繇・
王羲之・王献之の三人で、当時の書への認識をよく示しているもので
ある。

注1・1、『玄筆』（一九九六年五月）第二号―『玄筆』（二〇〇四年八月）第

一〇一号所載。

注1・2、皇太子の李世民は、武徳九年六月に父帝の高祖より譲位されて太
宗となった。武徳九年十二月二十九日は旧暦の大晦日で翌日は貞観元年
にあたり、虞世南による碑の作文・揮毫は貞観元年以後と考えられる。

注1・3、張彦遠『法書要録』巻八 所収

注1・4、『書断』では、楷書のことを「隸書」とし、隸書は「八分」として
いる。

2、虞世南の人物像

—虞世南が生きた時代— 『孔子廟堂碑』を撰文し、また揮毫者である虞世南が生きた時代について見てゆこう（注2・1）。虞世南は、陳（南朝）の永定二年（558）に生まれ、字を伯施（はくし）といった。越州（しゅうよう）余姚（いまの浙江省余姚市）の出身とされる。虞世南が生を受け、青年時代をおくった南北朝時代は、北朝（五胡十六国）においては北方民族が勢力を伸ばし、くわえて諸国の建国と滅亡が繰り返され、南朝（六朝）においては六つの王朝が短期間に交代した、三世紀後半から六世紀後半にかけての三百年ほどの期間にあたる。

—虞世南の家系— 虞世南の家系は、曾祖父の虞権（梁の人）まで知られる。虞権、そして祖父の虞檢（梁の人）また父の虞荔（503—561）と、三代にわたって梁朝に出仕していた。虞荔は古典に精通して作文をよくして武官（梁西中郎行参軍・法曹外兵参軍など）を歴任し、のちに皇帝直属の文官（通直散騎侍郎・中書舍人など）に転任している。こうした曾祖父・祖父・父の伝記から、門閥貴族の家柄であったと考えられる。また虞家は、代々にわたり武官であり文学にも通じていた。こうしたことは書聖といわれた王羲之なども門閥貴族であったが、右將軍（右軍將軍ともいう）を兼任したのと同様である。のちに虞荔は、梁朝滅亡をへて陳朝に出仕して重臣（太子中庶子・侍太子読書など）となっている。

—虞世南の成長— 虞世南は、虞家の習いにしたがい幼少より学問や書に親しんだと思われる。虞世南の性格は、「沈静寡欲（ものしずかで、執着がなかった）」と書かれている。兄の虞世基とともに学問を顧野王（注2・2）について修めること十余年、その様子は学ぶことに熱中して風呂に入らず髪を整えないままに二十日をすごしたとある。また作文は徐陵（注2・3）に私淑して、のちに徐陵もこれを認めたほどに、その文章力が評価された。書は、同郷の智永（ちえい）を師として王羲之を学んで、書名を高くしたとされる（注2・4）。

—徳行の人、虞世南— 虞世南の任官は、兄とともに陳朝に出仕したことに始まり、隋朝では兄弟ともに請われて煬帝に仕えた。世南五十歳から六十歳頃にあたり、秘書郎・起居舍人などに任官した。ただ世南の「峭正（厳正なこと）」な性格は煬帝には受け入れられず、昇位しないまま十年を過ごしている。ぎやくに兄の虞世基は、隋の煬帝の近侍となり累進して榮譽榮達を誇った。しかしこれが災いして隋滅亡に際しては、その責めを負って殺されてしまう。このとき虞世南は兄に代わって処刑を受けることを願ひ出て助命を嘆願し、虞世南の兄に対する深い真情を伝えている。また煬帝に招かれたときも最初は老母への孝養を理由に固辞している。こうした格別の肉親への情愛は、幼いときの父との死別が虞世南の人格の形成につよい影響を与えたと思われる。父の虞荔が亡くなった天嘉二年（561）は、虞世南四歳のことであった。のちに虞世南を諫言（皇帝に直言すること）の側近として厚く信頼した唐の太宗は、虞世南の五絶（いつつの優れた点）

として賞賛し、徳行・忠直・博学・文辞・書翰を挙げている。このうち最初の徳行は、もともと太宗が人物として信頼を寄せた一番の理由と考えられる。

―最晩年に活躍した虞世南― 唐朝では、皇太子の李世民（のちの太宗 599―649）に登用されて秦府参軍・太子中舍人に任官した。李世民が二十三歳で皇帝に即位すると、著作郎となり弘文館学士を兼任した。このとき、虞世南は七十歳になっていた。虞世南が『孔子廟堂碑』を作文・揮毫したのは、この頃のことである。のち秘書監にうつり、永興県公を叙爵された。貞観十二年（638）八十一歳で亡くなると礼部尚書が追贈され、また文懿を諡されて国家への貢献を顕彰された。亡骸は太宗の陵墓として準備されていた昭陵に倍葬されて、幽界にあっても太宗の近侍とされた。

注2・1、虞世南の伝記は、『旧唐書』（卷七二）・『新唐書』（卷一〇二）の虞世南伝、また『資治通鑑』（卷一八九・一九二）・『唐会要』（卷六五）などに見ることができる。

注2・2、顧野王（519―581）、南朝の梁・陳の学者。著に『玉篇』『輿地志』がある。

注2・3、徐陵（507―583）、南朝の梁・陳の文人。文章に優れ庾信と並び称され、その文体は徐庾体とよばれた。著に『玉台新詠』『徐孝穆集』がある。

注2・4、王羲之の書を学んだ記述については、『新唐書』には載せられてい

ない。

3、『孔子廟堂碑』拓本と翁方綱

―『孔子廟堂碑』拓本と翁方綱― 『孔子廟堂碑』は、三井記念美術館所蔵本がつとに有名である。これは臨川李氏旧蔵本（注3・1）とよばれるもので、唐碑最旧拓本と考えられている。この考えを確定したのは、清朝中期に活躍した翁方綱（1733―1818）である。翁方綱は、復刻本として当時いっばんに伝わっていた陝西本（注3・2）と城武本（注3・3）とを比較検討して、唐碑からの直接の拓本であり、さらに建立された当初の碑からの最初拓と審定した。翁方綱は、四度にわたり詳細な研究を試みている。最初の研究は翁方綱七十五歳（1807）のときで三十日を費やして熱中専心したもので、七十九歳・八十一歳・八十二歳のときにも考証をくわえている。碑文二千七十七字のすべてを精査して、このうち唐刻つまり原碑拓は千四百四十六字とし、ほかは陝西本旧拓による補欠または描摸（加筆による作字）という見極めをした。

これに加えて翁方綱自身が重要であるとした指摘がある、それは陝西本より城武本が優れているという前提で、このことは拓本跋文に書かれている。ところが、じつさいの翁方綱によって書き込まれた文字の検討の結果は陝西本の援用のみが指摘されて、城武本を指摘するところはない。翁方綱が指摘した城武本の例証は、字様説明の根拠とし

た箇所が二条あるだけである。

―三井本『孔子廟堂碑』拓本の伝来― 三井本『孔子廟堂碑』拓本の伝来については、翁方綱によって拓本跋文に書かれている。これには鑑賞・鑑蔵印に周雪坡・康里氏・康里傳脩があることを指摘している。このうち康里傳脩については康里不花のことで、元の著名な文人である康里子山（巖巖）の旧蔵であることを断定している。翁方綱は、康里子山が虞世南の書をよくしたことを判断の理由とした。その後のことは詳しく書かれず、李宗瀚の所蔵を記している。李宗瀚の入手した年については翁方綱跋文に嘉慶辛未の夏とあることから、一八一一年のことで李宗瀚四十三歳にあたる。翁方綱が最初に跋文を残したときは、まだ李宗瀚の所有ではなかった。二度目は七十九歳（1811）の六月に跋文を残すが、このとき所蔵者は李宗瀚になっていた。拓本の余紙部分に詳細な検討の跋文を残したのは八十一歳（1813）のときのこと、さらに城武本と対校は八十二歳（1814）のことである。このことから八十一歳のときの検討は陝西本によるものと推測される（注3・4）。

―三井本『孔子廟堂碑』拓本の翁方綱の研究― こんどは実際に拓本に残された翁方綱の書き込みを見てゆくことにする。各頁にわたって多数あるが、その指摘は以下の四点に大別できる。第一点（図3A）は、描または描補（拓本に書き加えを施したもの）・描失（拓本に書き加えて悪くしたもの）。第二点（図3B）は、陝本または陝本補（陝

西本から補ったもの）。第三点（図3C）は、妄改または妄添（あやまった貼りこみ）。第四点（図3D）は、唐本・唐石または真・真本（唐代の原拓）である。

図3は右から翁方綱の書き込み、三井本『孔子廟堂碑』拓本の文字、参考として陝西本をのせて比較の対象とする。ここでは一部をとりあげたが、二玄社『原色法帖選』第十二巻は完全複製をして翁方綱跋文のすべてを見ることが出来る。

注3・1、臨川李氏は、李宗瀚（1769―1831）のこと。江西省臨川県の出身。祖父・父の代より収蔵家として有名。蔵拓のうち『孔子廟堂碑』『孟法師碑』『啓法寺碑』『善才寺碑』は、李氏四宝と称された名品である。

注3・2、陝西本（長安本・西廟堂碑ともいう）は、唐末・五代のときの王彦超による重刻碑の拓本。陝西省博物館碑林第三室に現存する。近刊に羅振玉審定・至精宋拓『孔子廟堂碑』養心書道会（2005）がある。

注3・3、城武本（西廟堂碑ともいう）は、宋代の重刻碑の拓本。山東省武県に現存する。

注3・4、翁方綱の研究成果は、『孔子廟堂碑考』二巻としてまとめられた。また『復初齋文集』に『孔子廟堂碑』拓本にかなする文章五種がある。さらに『孔子廟堂碑』拓本をテーマにした詩一四種を『復初齋詩集』にみることができる。

4、三井本『孔子廟堂碑』の真相

―三井本『孔子廟堂碑』を復元する― 翁方綱によって詳細に点検された研究成果を、筆者はもう一步すすめて三井本『孔子廟堂碑』の復元を試みることにする(図4)。つまり現在の剪装本(拓本を行ごとに切つてアルバムに仕立てたもの)をもとにして、整本(石碑そのままの拓本)に戻してみようというものである。前述のとおり、『孔子廟堂碑』が重刻されたもので、原碑(最初に建てられた碑)は失われている。そこで有力な手がかりになるのが、いま西安碑林にある陝西本(陝本・西廟堂碑ともいう)である。これは石碑として残されているので、もとの虞世南の字姿からは訛変(悪く変化すること)しても、碑の一行の字数や行数など形式だけは継承されたと考えられる。

この陝西本をもとにして、翁方綱が指摘された陝西本によって補われた文字(翁方綱は陝本・陝本補と指摘している)を点検する。手順としてはパソコンの画像処理ソフトに陝西本をスキャン(読み取り)して、これに白丸(○)を入れた。図版4の白丸部分が陝西本から補った部分で、つまりこれ以外が原拓にある文字ということになる。掲載の図版ではすこし見にくいのが、文字に四角(□)を入れたところは拓本の文字に補筆(書き加え)を施した箇所(翁方綱は描・描補・描悪と指摘している)である。

―復元した三井本『孔子廟堂碑』を観る― 図版の復元本十行目下部から十一行目と十二行目上半までの欠字の箇所、また十六行目下部か

ら十七行目と十八行目上部までの欠字の箇所、この二箇所は原碑の損傷ではないと判断される。文字が連続して傷をうけることは、何らかの理由で原碑に刻された文章が削られたのでなければ、ありえないことだからである。筆者(遠藤)は、これらは剪装本に仕立てられたのち、ページごと脱落したのではと推測する。剪装本は紙と糊で貼り合わせて作られているので年月を経て古くなるとページ途中でばらばらになってしまうことは、格別に珍しいことではない。

二十五行目から二十九行目にかけての下部にまとまってある欠字は、おそらく原碑の損傷と思われる。碑は縦長に石を整形し設置することから下部になるほど傷が付きやすいものである。また補筆を施した箇所は碑全体に少なからずあるが、二十四行から二十九行目にかけての下半には補筆の文字が多数あつて欠字の箇所をあわせると、二十四行から二十九行目に損傷があつたことがわかる。

三十行目から最終の三十四行目の連続した欠字はページの脱落と考えられるが、わずかに原碑の文字が残されているので原碑がおおきく損なわれていた可能性も考えられる。

二行目の司徒・并州・牧・太子・左・千・牛・率・兼・校・安・北・大・都・護・相・王・旦・書・碑・額にある相王旦は、李旦(則天武后の子、のちの睿宗。662―716)のことで、李旦によって碑額の加筆がおこなわれ文章が追刻された。李旦が安国相王となつたのは七〇五年から七一〇年のあいだのことで、虞世南が六三八年に亡くなつてのち七十年ほどのちのことであつた。さらに翁方綱によれば、一行目の孔子・廟・堂・碑についても追刻としている(『孔子廟堂碑考』に拠る)。これらのことから一行目と二行目に文

字が刻されていないことが、原碑であることの重大な証明となっている。

―復元三井本『孔子廟堂碑』からわかること― こうして復元して欠字箇所と補筆箇所を点検してみると、欠字箇所と補筆箇所を除いて残されている文字には損傷が少ないことが理解できる。とくに原碑の二十四行から二十九行目の下部を除いた部分と、三十行目から最終行までを除いては痛みが大変少ないものであった。翁方綱の検証を追認することになる訳だが、今回の調査によって『孔子廟堂碑』の原碑の真相を伝える最初拓の善本であり、独孤本（世の中にたった一つしか伝来しない名品）と呼ばれるにふさわしい優品であることが改めて確認できた。

（追記） 図版製作にあたって、三井本を碑の姿に貼りなおす予定であったが、掲載図版の文字が小さくなって見えにくくなるため、陝西本を手直しすることにした。現在、陝西本は三箇に断裂して文字が欠損している部分があるが、三井本には欠損字がないことも原碑からの最初拓であることの証明である。また、陝西本の最終行には碑跋「推誠奉義。翊戴功臣。……（中略）……王彦超再建。安祚刻字。」がある。王彦超による陝西本を重刻した内容であるが、最初拓である三井本に、この碑跋がないのは当然のことである。

5. 結語

三井本『孔子廟堂碑』の真相への試論と題して、第一章において『孔子廟堂碑』の概説を行い、第二章において虞世南の人物像をまとめ、第三章において翁方綱の研究の『孔子廟堂碑』を点検し、第四章において『孔子廟堂碑』の原碑の再現を試みたことで、以下の五点を明らかにすることができた。

復元本『孔子廟堂碑』の十行目下部から十一行目と十二行目上半までの欠字の箇所、また十六行目下部から十七行目と十八行目上部までの欠字の箇所は、剪装本に仕立てられたのち、ページごと脱落したと推測できること（第一点）。

同二十五行目から二十九行目にかけての下部にまとまってある欠字は、原碑の損傷と思われること（第二点）。

同二十四行から二十九行目にかけての下半には補筆の文字が多数あって欠字の箇所をあわせると、二十四行から二十九行目に原碑の損傷があったこと（第三点）。

同三十行目から最終の三十四行目の連続した欠字はページの脱落と考えられるが、わずかに原碑の文字が残されているので原碑がおおきく損なわれていた可能性もあること（第四点）。

復元本『孔子廟堂碑』において欠字箇所と補筆箇所を除いて、残されている文字には損傷が少ないことが判明した。とくに原碑の二十四行から二十九行目の下部を除いた部分と、三十行目から最終行までを除いては痛みが大変少ないものであったこと（第五点）。

このうち第一点に指摘した、剪装本に仕立てられたのちページごと脱落したと推測できたことは、とくに従来の研究が文字ごとの検討に終始して言及の無いことで、本研究が始めて指摘したものである。また第二点から第五点は些事になるが、従来の研究において説明のないことであり、具体的に指摘を加えたことは本稿の成果である。

図版資料

- 『書道全集』7 平凡社 1955
『書跡名品叢刊』唐 虞世南 孔子廟堂碑』二玄社 1959
『原色法帖選』12 二玄社 1985
『中国法書選』32 二玄社 1988
羅振玉審定・至精宋拓『孔子廟堂碑』養心書道会 2005

参考文献

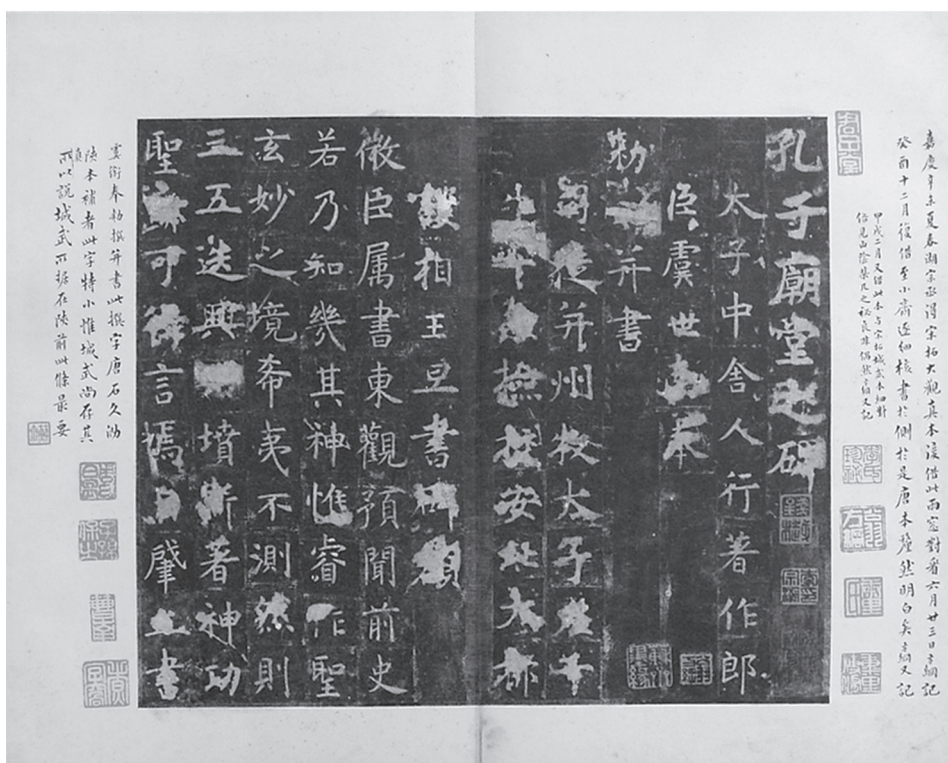
- 『旧唐書』(卷七二)
『新唐書』(卷一〇二)
『書道全集』7 平凡社 1955
『書道全集』8 平凡社 1957
『書跡名品叢刊』唐 虞世南 孔子廟堂碑』二玄社 1959
『書道芸術』3 中央公論社 1975
『増補 校碑隨筆』上海書画出版社 1981
『原色法帖選』12 二玄社 1985
『唐人書学論著 宣和書譜』世界書局 1988

- 『中国法書選』32 二玄社 1988
『中国法書ガイド』32 二玄社 1988
西林昭一『翁方綱の書学』柳原書店 1996
『羅振玉審定 孔子廟堂碑』養真書道会 2005
『大東書道研究』15 大東文化大学書道研究所 2007

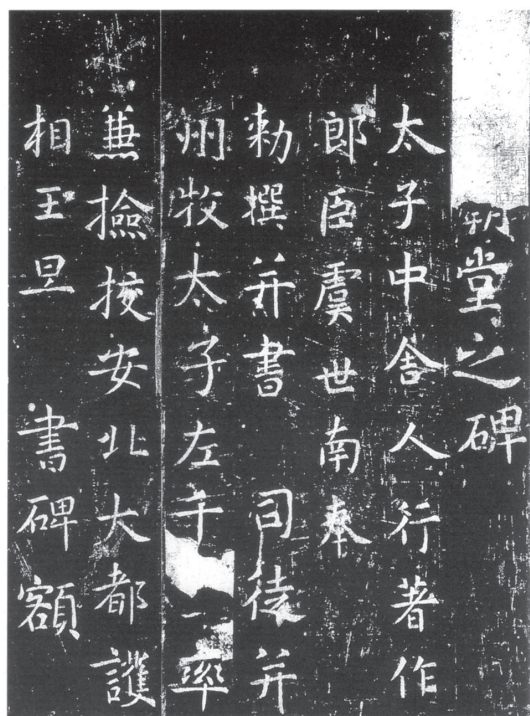
三井本「孔子廟堂碑」(冒頭部分)



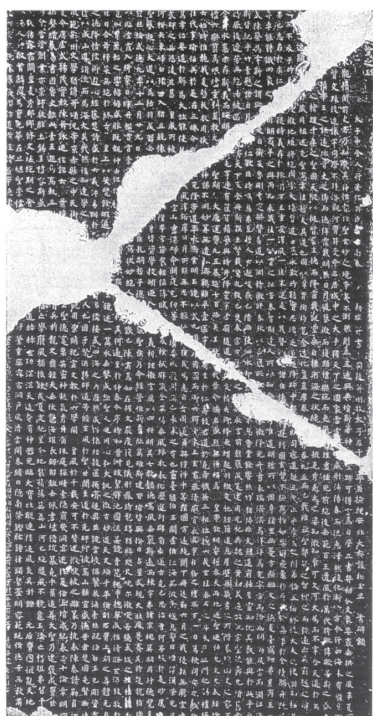
三井本「孔子廟堂碑」(冒頭部分) 全体現況



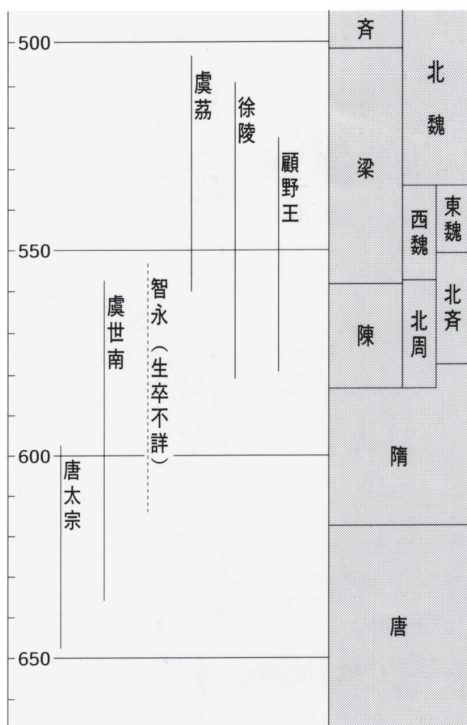
陝西本「孔子廟堂碑」(冒頭部分)



陝西本「孔子廟堂碑」(全景)



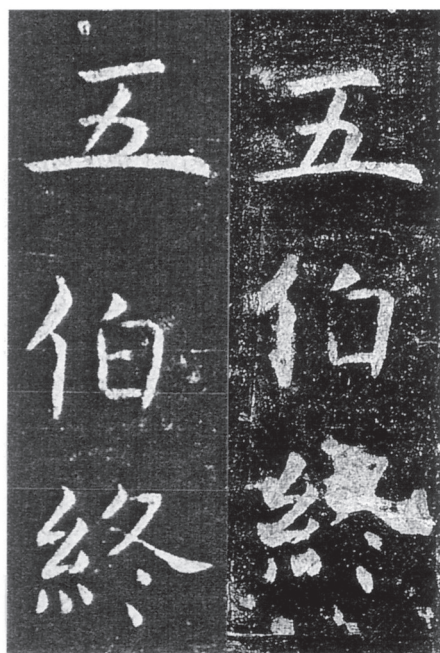
虞世南
『古聖賢像伝略』より



五字描



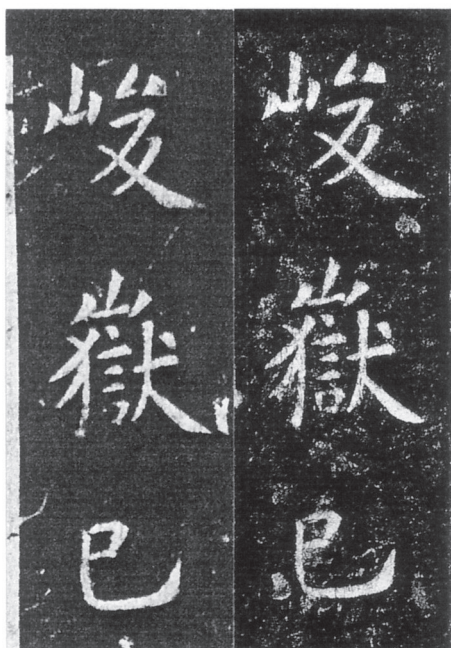
※すべて原寸



(陝西本) (三井本)

— A —

峻嶽已上皆陝本



(陝西本) (三井本)

— B —

十二月下廿字安改二十字



(陝西本) (三井本)

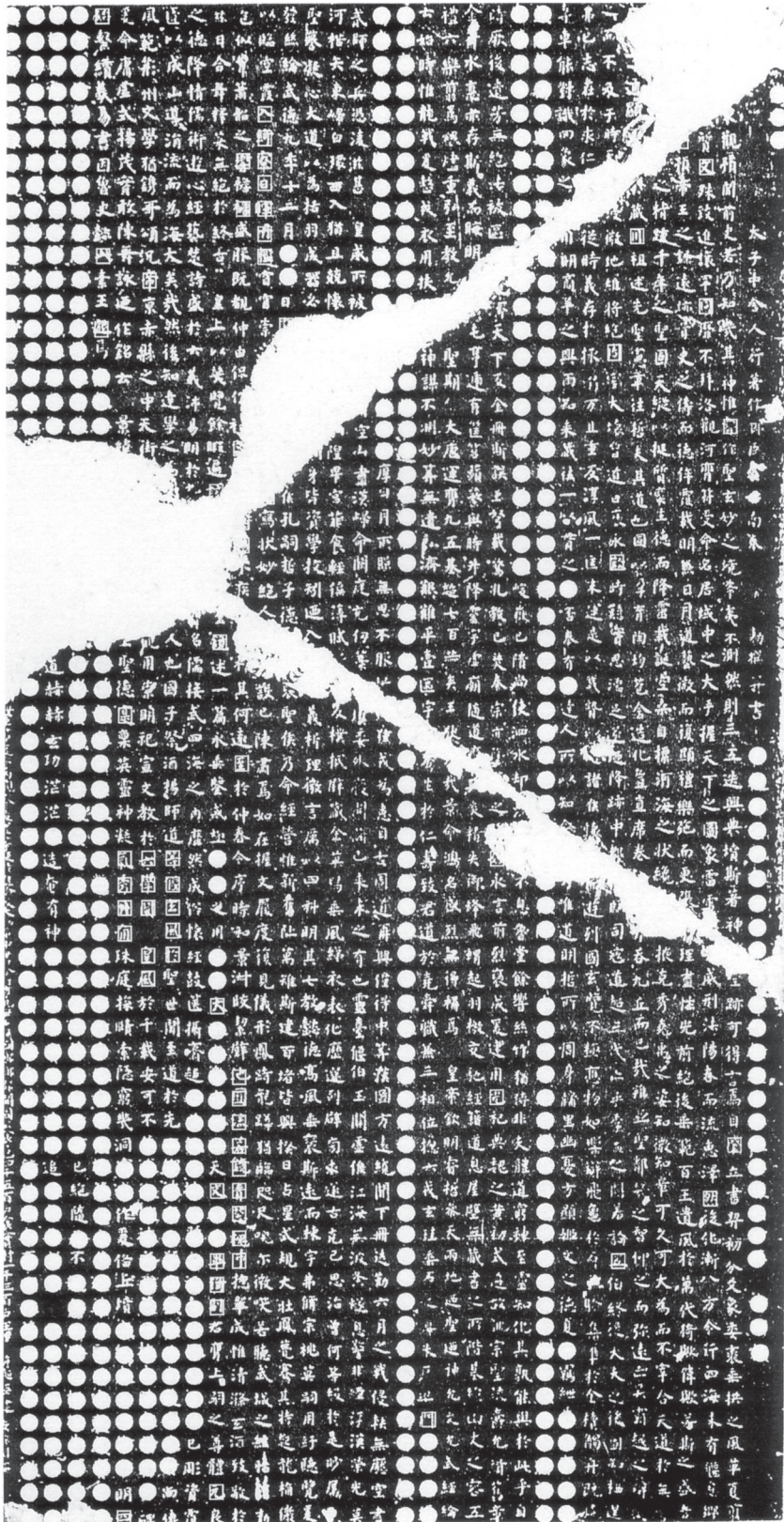
— C —

隕字以下又皆唐本



(陝西本) (三井本)

— D —



33 31 29 27 25 23 21 19 17 15 13 11 9 7 5 3 1 行
34 32 30 28 26 24 22 20 18 16 14 12 10 8 6 4 2